
笑顔技師

さやはち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑顔技師

【Nコード】

N2768D

【作者名】

さやはち

【あらすじ】

BUMPOFCHICKENのラフメーカーのファンフィクションです。受験でまわりにあたりちらしてしまふ少年にある日一通の手紙が……………。

(前書き)

初心者で下手かもしれませんが読んでみてください

教室に入るとざわめきが一瞬だけやんだ。すぐに何事もなかったように元に戻ったけど、雰囲気が少しかわったのを感じた。俺は小さく舌打ちをして、自分の席へむかう。どうせあとはホームルームだけだ。

入り口から一番遠い自分の席にむかう間に、教室ではしゃいでいる奴らが目にはいる。推薦入試で大学がきまった奴らだ。俺はまた小さく舌打ちをしてさらに進んだ。談笑していた集団は俺を避けるように移動し、周りからはチラチラと見てくる視線を痛いほど感じた。その視線は、いつもまわりにあたりちらして俺自身が生んだものだったが、それは俺をさらにイライラさせるだけだった。

席についてももう一度小さく舌打ちをしようとしたが、思い留まってかわりにため息をついた。心の中であとは帰るだけだと思おうとしたけれど、帰っても受験勉強するだけだと思おうとさらに気が沈んだ。

終礼をして、早く荷物をして帰ろうと机の中のもの出すと、一番上に見覚えのない封筒があった。少し不思議に思ったけれど、またあの視線を感じたので、他の荷物と一緒にカバンに詰め込んで席を立った。

家に帰るといつもどおり自分の部屋に閉じこもった。机に向かって、勉強を始めようとカバンを開けたら、あの封筒が目についた。取り出してみてもみたが、何も書かれていない。裏にも。真っ白な封筒の上には、郵便番号を書くための赤い枠だけが、ひとつも埋まらずに印刷されていた。やはり見覚えがなく、気味が悪くなってポイツとゴミ箱に放り投げた。

そこからしばらく勉強をしていたが、イライラするばかりでなかなか進まなかった。ふと、ゴミ箱の封筒が目についた。なんとなく拾い上げて、裏と表を何度か見てみるがやはり何も書いていない。

興味をひかれて封筒の端を破いて開け、中を出してみた。入っていたのは、シンプルなただ横線のはいつただけの便箋だった。

『寺井真治くんへ』

寺井くん

最近

イライラしてないかい？ 周りの皆も

当り散らされて

避けがちになってるよ

嫌なことがあるなら

この僕に言ってみよう

僕？

僕の名前はラフメーカー そう

君に笑顔をプレゼント

明日

中休みに屋上へ

寒いから遅れないように きつと来いよ

ラフメーカー』

誰だこんなもん書いたのは。読んですぐに怒りがこみ上げてきた。俺は、封筒ごと手紙をまるめて再びゴミ箱に放り投げた。シャーペンを持って続きをやるうとしたが、もうやる気もなくし、そのままベッドに倒れこんで晩飯も食べずに寝入ってしまった。

次の日の中休みには、当然屋上に行かなかった。次の授業中に視線を感じたが、ざまあみると思った。それですっきりしたおかげかはたまた昨日たっぷり寝たせいかな、その日の午前中は、いつもみたいにイライラせずにすんだ。午後もこうだいたいと思いつながら、昼食のために手を洗いに行きかえってくると、机の上にあの封筒が置いてあった。いっきにイライラしてきた。しつこいつての、せつかきい感じだったのに。俺は小さく舌打ちして、席について封筒の端を乱暴に破った。中の便箋も同じものだった。

『寺井真治くんへ』

寒かったです

でも僕はあきらめません これだけが

生き甲斐だから

放課後また待ってます

ラフメーカー[㊦]

教室には弁当を食べる集団がいくつかできていて、いつもならイライラしてしまう楽しそうな話し声があちこちから聞こえた。でも今は違った。あの視線も感じない。俺は手紙から目が離せなかった。本気で他人の相談にのる奴なんていないと思っていた。いつもは友達していたって、わざわざ悩んでる奴の話聞いて、面倒ごとに首突っ込む奴なんていないって思ってた。

でも、もうラフメーカーを疑うことはできない。そのシンプルで横線だけが入っているだけのはずの便箋には、涙でいくつも模様が出ていた。

屋上は本当に寒かった。この中で待たせたのをいまさら申し訳なく思った。ポケットに手を通り込むと、手紙が手にあたった。家のゴミ箱の手紙を思い出す。よく言えば今日いらいらしなかったのはあの手紙のおかげだったのかもしれない。もともと俺のイライラは、受験勉強でストレスがたまったり、寝不足が原因だった。スポーツ校のうちの学校では、まわりは推薦入試ばかりで愚痴を言う相手もいなかった。でも、昨日の手紙では何でも言っるといわれた。本当はうれしかった、あの手紙が。俺は、家に帰ったらゴミ箱から救わなければと思いつきながら、グラウンドの女子ソフト部の練習を見ながら待つことにした。

……こない……こない……こない……こない……コナイ。もう30分は待っている。ポケットの手紙を握り締め、まさかと思った。信じてしまった。名前も明かしてないのに。取り出した手紙は、もうしわくちゃになっていた。こんなものに。そう思い、破り捨てようとしたそのとき、屋上のドアが勢いよくあいた。

息も絶え絶えなそいつは金属バットを持っていた。ソフトボール

のユニフォーム。さっきまで練習していた女子ソフト部。ようやく息が整い上げた顔は、見覚えがあった。同じクラスの中島だ。

呆然とする俺にニツと笑いかけて、俺の目の前まで来た。

「ごめん。後輩にノック頼まれちゃって。断りきれなくて、遅れちゃった。ま、中休みは待たされたんだからおあいこってことで。：

…で、ハイ」

自称ラフメーカー中島は、ポケットから何かを取り出し、俺の顔のすぐ前に突きつけた。

「眉間にいつもしわよせて、あんたのその顔笑えるよ」

鏡だった。ショートカットでいつも男勝りな中島には似合わない、かわいらしい鏡には、不機嫌そうな俺がいた。それをみた時、フツと力が抜けた。ラフメーカーは笑っていた。俺も笑い出した。声を出して笑った。大声で笑った。笑顔になったのは久しぶりだった。

(後書き)

いかがだったでしょうか？なにか感想をいただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2768d/>

笑顔技師

2010年10月21日23時55分発行